

座長 高橋壯一郎

4. アスピリン負荷後の MDA 生成による
血小板寿命の測定

安中 裕子・佐藤 てい (新潟南病院) 検査科
相馬 陽子
渡部 透・伊藤 粋子 (同 内科)
布施 一郎 (新潟大学) 第一内科

5. 脳血栓のアスピリン療法

大西 洋司・鈴木 昭治 (新潟市民病院) 神経内科
星 允

6. 血小板増多をみとめた癌 2 症例

佐藤 正之・高橋 滋 (県立ガンセンター) 新潟病院内科
村川 英三

血小板増多を呈した癌症例 2 例を報告し、当院における二次性血小板増多症の臨床的検討も行った。

症例 1：62才男。57.8.12 初診。肺癌（扁平上皮癌）
WBC 21,100, Hb 12.4g/dl, pl 71.7×10⁴, NCC 8.1×10⁴/cmm, Meg 94/cmm, NAP 正常, CRP (-), 凝血学的異常なし。PRP 37×10⁴ で自然凝集を認め各種凝集惹起物質でも血小板凝集亢進を認めた。化学療法で腫瘍縮少とともに pl 30×10⁴ と減少、腫瘍増大につれ pl 80×10⁴ と増加。

症例 2：81才男。57.10.12 初診。膀胱腫瘍・肺性心。
WBC 14,700, Hb 13.2g/dl, pl 128.4×10⁴, NCC 2.8×10⁴/cmm, Meg 94/cmm, NAP 正常, aPTT-PT 軽度延長。PRP 44×10⁴ で自然凝集はないが各種凝集惹起物質で血小板凝集亢進を認めた。症状軽快につれ pl 60×10⁴ 前後となる。最近10ヶ月間で当院で pl 70×10⁴ 以上の症例は52症例（検体頻度0.37%）で造血管腫瘍を除いた39例中悪性腫瘍23例、良性疾患9例、不明7例であるが疾患特異性はみられない。腫瘍に伴う血小板増多例では血清あるいは腫瘍中のトロンボポエチンあるいは CFU-Meg の測定が容易となることが望まれる。

7. 人工弁置換患者の血小板の形態及び機能に関する研究

花野 政晴・服部 晃
滝沢慎一郎・布施 一郎 (新潟大学) 第一内科
大滝 英二・小島 研司
長山 礼三・高橋 芳右
和泉 徹・柴田 昭
坂下 勲・林 純一 (同 第二外科)
江口 昭治
小島 知子 (新潟鉄道病院) 内科

帰朝講演

司会 服部 晃
Platelet type von Willebrand's disease
新潟大学第一内科
高橋 芳右 先生

特別講演

司会 柴田 昭
生理的線維素溶解とその先天異常
自治医科大学止血血栓教授
青木 延雄 先生

第 6 回新潟血栓止血研究会

日時 昭和58年6月4日
場所 ホテル新潟
幹事 渡部 透

一般演題

座長 品田 章二

1. 脳血栓の血小板機能と抗血小板薬

チクロピジン

高橋壯一郎・荒井 奥弘 (長岡赤十字病院) 内科
宮村 祥二・鴨井 健介
黒川 和泉・鈴木 健介
鈴木 正博・川瀬 康裕 (同 神経内科)
外山 孚 (同 脳外科)
宮路 久子・片桐 智美 (同 検査部)

2. ワーファリンは脳梗塞を予防できるか
(150例の経験から)

本間 義章 (佐渡総合病院) 神経内科

目的：虚血性脳疾患に対する抗凝固療法につき、その年間再発症率と副作用の点から評価した。

対象と方法：急性期を過ぎた虚血性脳疾患のうち再発の危険の高い 150 例（平均66歳）にワーファリンを投与した。抗凝固能はトロンボテスト値で10～25%を目標とした。

結果：80例（53%）は平均34.5カ月間順調に経過したが、他の70例はトラブルにあつか投薬を中止した。全体の平均投薬期間は2年3カ月であり、コントロールの悪い2例に完成型脳梗塞の再発をみた。TIA 2例, RIND 1例の再発を加えても年間再発症率は1.5%にすぎなかつ

た。出血事故は15例(10%)にみられた。そのうち血圧上昇による脳出血死亡は2例であった。

3. アスピリン微量投与による血小板凝集能とMDAの検討

相馬 陽子・古藤 祐子 (新潟南病院
検査部)
伊藤 粋子・渡部 透 (同 内科)
布施 一郎 (新潟大学
第一内科)

座長 坂下 勲

4. Plasma cell dyscrasia に伴った高度な線溶異常

小池 正・吉野 紀子
小諸のり子・布施 一郎 (新潟大学
第一外科)
津田 隆・長山 礼三
高橋 芳右・服部 晃
柴田 昭

5. PTCR の治療経験

岡部 正明・松岡 東明 (立川総合病院)
大滝 英二・高野 諭 (内科)

6. 人工弁置換後急性期における溶血の検討

林 純一・横沢 忠夫 (新潟大学
第二外科)
大谷 信一・斎藤 憲
八木 実・江口 昭治
田中いずみ (同
第一内科)
品田 章二 (同
輸血部)

人工弁置換後は、弁の前後に渦流・乱流を生じ、また間隙からの漏れ、縫合不全などにより逆流が生じることもあり、血管内容血の発生は稀ではない。術後1日目から1年目に至るまでの溶血の程度を弁置換症例9例について検討した。年齢は13才～63才(平均46才)男3例女6例。血清LDH値は第1病日から7病日までは700～1,800iu/lと高値をとったが3週以降は500iu/l以下とおおむね正常の群(n=5)と600～900iu/lの高値の群(n=4)にわかれた。血清ハプトグロビンは一貫してゼロの群(n=4)と第3病日以降出現し、3週目に50～140mg/dlとほぼ満足しえる量に達する群(n=5)とにわかれた。以上より人工弁置換後の血管内容血は、術後2～3週の時点で軽微で無視できる程度の溶血(LDH500iu/l以下, Hpt50～140mg/dl)と中等度溶血(LDH600～900iu/l, Hpt=0)とに区別しえることが明らかとなった。

特別講演

司会 田中 隆一

頸動脈の血栓内膜剥離術

新潟大学脳神経外科教室

小野 博久 先生

第7回新潟血栓止血研究会

日時 昭和58年11月26日

場所 新潟グランドホテル

幹事 佐藤 正之

一般演題

座長 中村 忠夫

1. Ticlopidine が著効した血栓性血小板減少性紫斑病の1例

牧野 正彦・黒川 和泉 (長岡赤十字病院)
鴨井 久司・高橋壮一郎 (内科)
荒井 奥弘
宮路 久子 (同 検査部)

2. ビタミンK依存凝固因子の著明な低下をきたした成人例について

滝沢慎一郎・牧野 正彦 (新潟市民病院)
吉田 博美・真田 雅好 (内科)
塚田 恒安
西田 和男・本多 拓 (同 脳外科)

成人でV.K欠乏症に陥ることは極めて稀とされている。最近、中心静脈栄養の普及に伴い、経口摂取不能例で長期抗生剤投与を受ける例が増加しており、V.K欠乏症の報告がある。我々は前述の様な症例で、出血症状、検査成績より、V.K欠乏症と思われた症例を経験したので報告する。

患者は胃癌、肺癌、脳腫瘍、急性単球性白血病、成人T細胞性白血病の5例である。全例に明らかな出血症状とトロンボテストの著明な低下を認めた。うち2例に下痢を認め、3例には γ -carboxylation阻害作用有す第3世代の抗生物質が投与されていた。1例では経口摂取の再開により、残り4例でV.Kの静注にて出血症状、トロンボテストの著明改善を認めた。

前述の様な例では、出血症状の如何に関わらず、トロンボテスト等の凝固検査とV.Kの補給が必要であると考える。